仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑫

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

鳩摩羅什一門の活躍

鳩摩羅什は漢訳の過程で多くの漢人門下を育てた。彼に師事した門下の数は三千人ともいわれている。彼らは鳩摩羅什と共に漢訳に従事しつつ、訳場では議論に参加し、それまでの漢訳の不備を認識するようになった。彼らはまた筆受として、鳩摩羅什の口述に対して、より洗練された漢文を施した。漢訳作業を通じて彼らは教理理解を深め、中国での仏教受容に貢献した。なかでも高弟の僧肇（そうじょう）、道融（どうゆう）、道生（どうしょう）、僧叡（そうえい）は四聖と称された。

僧肇は若くして鳩摩羅什に師事した。彼は『肇論』を記し、鳩摩羅什がもたらした龍樹の般若教学を、老荘思想の用語を用いて中国的文脈に再解釈し、中国に定着させようとした。彼は『般若無知論』の中で、般若は知る側と知られる側という対立を離れており、般若に智慧はないとした（石井，2019:72）。僧肇は、般若を一般的な概念知と区別して特殊な認識機能としてとらえ、知と不知の相対性を超越した完全なる一切智であるとした。

道融はインドから来華したバラモンとの対論で相手を論破し懺悔させるほど卓越した能力を備えていた（鎌田，1983：305）。鳩摩羅什は『法華経』訳出の際、道融にその内容を講じさせた。それを聞いた鳩摩羅什は「仏法の興るは、融其人なり」とその内容を絶賛したという。

道生は、「頓悟成仏説」「善不受報」「法身無色論」「仏無浄土論」など、それまでの中国における学説を否定する新しい学説を主張した。鳩摩羅什から空の思想を学んだ道生は、万物の根底に存在する道理、普遍的真理を「理」とし、存在の否定に関して「有」と「無」をそれぞれ別体別異なものとせず、あくまでも「一」なる「理」の顕現であり、その「理」を悟ることによって仏となるとした。彼は仏教概念としての「仏性」を、中国の思想概念である「理」として理解した。この「理」による仏教理解は道家思想に基盤を持つので、道生の思想を格義的であるとする見方もある（伊藤，1992:187）。彼は諸経典を整理するために、在家信徒のための「善浄法輪」、相手に応じて三乗を説いた「方便法輪」、成熟した者に真実を明かした『法華経』の「真実法輪」、涅槃直前に仏性を説いた『涅槃経』の「無余法輪」にそれぞれ分類した（石井，2019:78）。経典相互の関係とその位置付けに注目した道生の説は、教相判釈の先駆けとなった。

道生と同じく諸経典の関係に注目した僧叡は『喩疑』を記し、そのなかで、法華、般若、泥洹（ないおん）（涅槃）の三経の相違について独自の論理を展開した。彼は『般若経』は衆生の虚妄を除き、『法華経』は一究竟を開示し、『泥洹経』は仏の真実の教化を明らかにしたものであるとし、「優劣は人に存し、深浅は其の悟に在る」と述べ、三経の相互の優劣を否定した（鎌田，1983:301）。実は、この世の一切の事象・事物は空であり、存在しえないと説く『般若経』と、全ての衆生にはみな仏性が宿り、泥洹は永遠不滅であると説く『泥洹経』は内容的には対立しており、相互の矛盾から仏性の解釈と人間の本性に関する論争がしばしば起きていた。多様な経典がランダムに将来され、それらが随時翻訳され断片的に流布し併存している中国仏教の特殊な状況を僧叡は憂いでいた。彼の著作からは、それぞれの経典の理解はもとより、それらが説く教理をどのように位置付けて、いかに中国仏教としての綱格を示し、体系化していくかに苦心していたかがわかる。中国における仏教の受容と変容の“はざま”には、教えの体系化という断層が垣間見える。僧叡は『喩疑』の中で鳩摩羅什の教えとして次のように記している。

> 「五十余年にわたる釈尊（しゃくそん）一代の説法は、みな真実である。だからこそ人びとを益することができる。就中（なかんずく）、解脱という真の利益を。（中略）諸経典に教えがさまざまに説かれているのは「随宜」である。すなわちそれぞれの説法は、機根に差がある衆生に応じてなされている。そのために如来（にょらい）は三乗（さんじょう）の教えをもって教化したのである。したがって、もしその趣旨を理解するならば、すべての教説は意味ある深い教えとなり、一部に固執し他を否定するなど全くの誤りである。」（堀内，2010:113-114）

諸経典に通じていた鳩摩羅什は、一様ではない教理の相互関係に対して、経典全体を俯瞰的に捉え、それぞれの経典はその位置付け如何によって真価を発揮するか否かが決まると考えていた。しかるべき位置を与えることによってはじめて諸経典の意味内容を的確に了解でき、一部の経典への偏執から脱却できるとする鳩摩羅什の達観した経典観に触れ、彼に師事した英才たちは、中国仏教という枠組みを構築し、その中にそれぞれの経典の理解を落とし込む学問的態度を身につけた。

そのような思想的成熟は、漢訳仏典を介して教理が思想として体系的に受容され、仏教が中国的に深化する要因になったと考えられる。その深化は羅什教団とも称される鳩摩羅什一門の漢人訳経僧の尽力によって急速に進んだ。彼らの出身地は様々であり、鳩摩羅什を敬慕し、各地から優秀な人材が長安に集結したことがわかる。彼らは鳩摩羅什の謦咳（けいがい）に接し、漢訳作業を通してそれぞれの才能を開花させた。彼らが残した経序や注釈を見ると、鳩摩羅什が翻訳者としてだけではなく、思想家として門下を指導していたことが窺える。伝道と翻訳の関係を考察する上で、訳経という実際的な成果のみならず、彼が訳経を通して多くの門下を育成し、優れた訳経僧を輩出した点は注目に値する。

他の訳経と比較すると、鳩摩羅什の訳経は篤信家であった後秦の王、姚興（ようこう）の手厚い支援のもと進められた国家事業であった点も看過できない。姚興は外護者として鳩摩羅什の活躍に大きな期待を寄せていた。その政治的経済的支援なくしては鳩摩羅什も天賦の才を存分に発揮できず、彼の翻訳もこれほどまでの成果を挙げることはなかっただろう。鳩摩羅什の訳経は、優秀な門下の支えと強力な外護者の存在という好条件に恵まれた、中国仏教史上初の一大事業であったといえる。

[引用文献]
伊藤隆寿『中国仏教の批判的研究』大蔵出版、1992年。
鎌田茂雄『中国仏教史第二巻受容期の仏教』東京大学出版会、1983年。
石井公成『東アジア仏教史』岩波書店、2019年。
堀内伸二「羅什三蔵とその弟子の教判論」『新アジア仏教史06 仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010年。